



「低血糖症体験集」がいよいよ(株)ヨーゼフから6月23日に出版されます。「低血糖症と精神疾患治療の手引」も同じ日に第3版が出されます。7月には「機能的低血糖症ガイドライン」(A4判)、9月には「自閉症治療の試みと成果」(A5判)をそれぞれ出版しようという準備を進めています。鹿児島大学医学部との共同研究に用いるため、娘の主愛副院長に担当してもらって論文を日英文で作成中です。

治療の成果が続々と出てきました。ただ、治療上で患者さんが薬と同じような即効性を期待する方が多く、分子整合栄養医学をきちんと説明しなければならぬと思っています。薬物治療は、症状を抑えるための直接的なものです。他方、栄養医学は、その症状をもたらす器官や機能の原因を探り、栄養や運動などによってその器官や身体全体を回復させて治療しようとするもので、対処法が本来的に異なるのです。

症状がなくても器官には障害がある場合があり、それを「未だ病に至らず」で未病と言います。健康にも100%はないのですが、治ったと思つて無理な仕事や生活をするとか症状が出てきます。全ての人が何らかの病気持ちなのだから、それを調整しながら生きるほうが幸せには近いと思うのですが、日本人の生き方には無理があるようです。

妻は飽きないけれど呆れる人で、周囲の人は可愛いと言つてくれるのですが、近くにいる夫は、未病のような存在と判断し、いつも注意深く見守っています。ところが、それが健全な関係を保つものとなり、仲良く過ごせています。西洋医学的発想は病因の除去ですが、一病息災というように身体全体を大事に見守るほうが長生きはするものです。ガンは治つたけれど、死んでしまったということがよくあります。栄養医学をして、不妊症やアレルギーが治つたり、体調が良くなるということはいっぱいあります。子供のことを口うるさく指導していると、子供が不安定になりますね。問題は、少し覚悟すると幸せになれるですよ。

事務長・柏崎久雄

\* **感染症の疑いのある方は廊下の入口から**

インフルエンザ、風邪、おたふくかぜ、はしか等が疑われる方は、中央通路わきにあるインターホンでご連絡ください。院内感染を避けるためご協力ください。待合室も病態別に隔離して診察します。

\* 麻疹・風疹の予防接種が来年の3月までは、高校2

年生も対象になりました。日本脳炎の予防接種が、4歳〜16歳(接種を受ける機会を逸した者)までとなりました。その他の予防接種も含めて詳細は受付に御相談ください。

\* 速やかな診察の為に管理栄養士の栄養指導を事前予

約してください。栄養指導が必要と診断された場合には、管理栄養士が開くのを待つので診察が遅くなります。予約されても指導の変化がなければ、無料となります。

\* **ビタミンC点滴療法について**

ガン治療の選択肢として、体維持と治療のため副作用の無い高濃度ビタミンC点滴療法をお勧めしています。今月のニュースをご覧ください。

\* **「聖書を読む会」6月14日(火)2時〜2時20分**

低血糖症治療の会の全体研修会が6月23日(木)10時半から催されます。

\* 「低血糖症治療体験集」1050円を6月23日ま

でに予約先払いした方に1冊700円で販売します。ヨーゼフ店舗やメールなどでお申込みください。

\* **スカイプ(ネットテレビ電話)による栄養指導を始め**

ました(30分¥4200)。スカイプの設定の説明はいたしません。

# 〈がん治療に関する当院の方針〉

## I. 日本の現状

1980年以後、日本における第一の死因はがんとなり、年齢が進むにつれてガンでの死亡率も増加しています。ガン患者が増加していくとともに、それをサポートする医療の質が問われる時代ともなりました。医師の説明・治療方法に対して納得できず、様々な医療機関へと足を運ぶ「ガン難民」が急速に増加していることは事実です。医師・医療者からの治療法の説明(インフォームド・コンセント)に対して不安感や不満を感じる人が自ら治療法を選択する(インフォームド・チョイス)時代へと変化しているのです。

## II. ガン治療の現状

ガンとは、タンパク質代謝異常であるため、さまざまな器官でガン細胞が発見され、がん細胞より細胞分裂が早い消化器や骨髄は、転移する可能性が最も多い場所となります。転移については、血行性転移・リンパ節転移などがあり、癌と同じ血管からの血流の多い臓器、リンパ流の多い臓器は転移が起こりやすいのです。脳転移、肺転移、骨髄転移、肝転移は頻度の多いものとして知られていますが、血流が多いためと考えられます。

ガンに対する治療の成果は飛躍的に向上していると言われる中、罹患率・死亡率は年々増加しています。ガンの治療法として、外科切除療法・化学療法・放射線照射があげられ、いずれもガン細胞以外の正常細胞にも影響し、患者本人が受けるダメージは大きいのです。抗ガン剤に対するガンの反応は必ずしも均一ではなく、抗ガン剤耐性細胞の出現も見られます。抗ガン剤による痛みの軽減や一時的な緩和は、患者の負担を和らげるため必要でないとは言えないが、果たして抗ガン剤治療が患者本人にとって良い治療法なのかは疑問です。

## III. 自己免疫強化に対する栄養治療

ガンは一定の大きさになると、近くの血管から自分専用の血管を引き込み、栄養や酸素を補給することで増殖し、さまざまな部位に転移しやすくなります。ガン患者は、高齢者や免疫不全患者などの免疫機能低下状態の場合に発症率が高く、免疫能の低下は栄養状態によって影響され、ガン治療の回数をこなしていくことでも起こるため、免疫強化に対する栄養治療の強化が必要となります。

### A. 自然免疫と獲得免疫

自然免疫とは、マクロファージ・NK細胞・多核白血球系(好中球・好酸球・好塩基球)が主役で、生まれつきもっている免疫機能のことで、非特異的にガン細胞を認識する生体内の監視機構である。獲得免疫とは、さまざまな抗原に感染することで作動する免疫機能で、主にT細胞・B細胞などである。自然免疫で撃退しきれなかった場合に獲得免疫が作動する。

### B. フコイダン

1. 免疫増強作用のあるフコイダンを摂取すると、マクロファージ(大食細胞)が活性化されるとともにNK細胞も活性化され、ガン細胞膜にあるレセプターへの攻撃力が増強する。
2. アポトーシス誘導作用;アポトーシスは、生体にとって有害な細胞を排除するための自己防衛システムの1つで、細胞自ら死んでいく作用である。ガン細胞のアポトーシスを誘発するのはU-フコイダンのみである。U-フコイダンがガン細胞の膜に存在するガン細胞表面膜レセプター(アポトーシス開始スイッチ)に対して誘発し、正常な細胞にはほとんど影響を与えない。
3. 血管新生抑制;EPAと合わせて摂取することで血管新生を抑制する作用がある。通常、悪性腫瘍は血管新生によってがん細胞の栄養補給経路を確保し、加速度的に増殖することが知られている。
4. 転移抑制

がん細胞が浸潤しようとしている臓器表面の接着因子と競合するためがん細胞は臓器を接着できず、転移を抑制することができる。

### C. 補体

抗体が体内に侵入してきた最近などの微生物に結合すると、補体は抗体により活性化され、細菌の細胞膜を壊すなどして生体防御に働く。補体とは血液中に存在して抗体を助け、免疫反応を円滑に

進める約 20 種類のタンパク質のことである。補体は自己免疫反応の程度を把握する目安となり、補体が低下するとガンにかかりやすくなる。

#### IV. ガンと栄養

ガンは基本的に栄養欠損状態であり、原因は、第一に正常な細胞からガン細胞がタンパク質を奪取し、それを栄養にして成長していくこと。第二にガン患者の栄養摂取不足。第三に消化器ガンや化学療法によって引き起こされる消化吸収不全・組織崩壊・出血などによる栄養欠損の増悪。第四は重要感染の影響などです。

また、ガン患者に多いのが貧血です。ガン細胞は酸素を必要としないので、脳が酸欠状態へと陥ってしまいます。また、転移や合併症などによって状態が増悪され、さらに化学療法や放射性治療によって二次的な障害が発症し、さらに加えてタンパク質を中心に栄養欠損性の造血低下が病態を悪化させており、ガン患者にとって、貧血の改善は必須アプローチと言えます。

ガン患者の発ガンした細胞を調べてみると、脂溶性ビタミンであるビタミン A が全くなかったそうです。ビタミン A が欠乏すると粘膜の委縮が起こり、細胞分裂が活発になり腫瘍性のある細胞へと変化します。ビタミン A は細胞の分化を正常に維持するのに必要であるため、ガン予防に有用だと考えられます。

#### V. 超高濃度ビタミン C 点滴療法

##### 1. ビタミン C がガン細胞を殺すメカニズム

ビタミン C そのものはガン細胞を殺すことはありませんが、ビタミン C が体内で発生させるオキシフルがガン細胞を殺すのです。正常細胞にはオキシフルを分解する酵素(カタラーゼとかグルタチオンなど)が豊富にあるため、短時間で分解されるので生体には無害なのですが、ガン細胞には、こういった分解酵素が非常に少ないため、オキシフルは分解されにくく、オキシフルによって殺されてしまいます。抗がん剤は確かにガン細胞を殺しますが、同時に正常細胞をも殺してしまいます。超高濃度ビタミン C 点滴療法が画期的なのは、抗がん剤でありながら、正常細胞になんら副作用を与えないことです。このような抗がん剤はいまだかつてありませんでした。

##### 2. 「高濃度」と「超高濃度」では、効果がまったく違う

50グラム未満を高濃度ビタミン C 点滴療法、50グラム以上を超高濃度ビタミン C 点滴療法として区別しています。臨床試験では、50グラムを境にして、「高濃度」と「超高濃度」とでは、ガンに対する作用がまったく異なり、「高濃度」ですと単なる免疫療法ですが、「超高濃度」では、抗がん剤になるのです。超高濃度ビタミン C 点滴は、がん手術後の再発・転移の予防効果があります。

目に見えてよくわかる効果として、QOL がよくなります。誰が見ても、本人の体の状態が改善している、疲れなくなった、だるさが取れた、活力が出ている、などの効果が大きいようです。効果は点滴の数に比例する。効果は点滴の頻度に比例する。効果はビタミン C の血清濃度に比例する。効果はビタミン C のがん細胞殺傷能力に比例する。のです。

##### 3. ビタミン C 点滴療法の十大効果

###### [1] 耐性のない天然の抗ガン剤である

ビタミン C 療法はガン細胞に対して、薬物耐性が起きていません。これは医学の常識に反する実に不思議なことです。過酸化水素水でガン細胞が死んでいくメカニズムには、3つのルートが推察されています。ひとつは、DNA(遺伝子)障害、2つめは、エネルギー源であるブドウ糖代謝障害、3つめはミトコンドリア(重要な生命活動の場)障害です。ビタミン C の抗がん作用の作用点は、ガン細胞の代謝の多数箇所(マルチプルポイント)に同時に働いています。

###### [2] 免疫力を上げる

- ・ 超高濃度ビタミン C 点滴療法は、進行がんで免疫力が落ちている人でも、抗がん剤で免疫力の落ちている人でも、かぜさえ引きにくい免疫力にまで上げてくれるすばらしい治療法です。

###### [3] コラーゲンを増殖させる

ガン細胞の周りにはコラーゲンがたくさんありますが、ビタミン C 点滴によってコラーゲンが増殖すると、これがガン細胞の周りをがんじがらめに固めて、ガン細胞が飛び散らないように捕捉し、物理的に

抑えていくと考えられています。コラーゲンは同じ重さの鉄鋼よりも固いのです。がん細胞をコラーゲンというカプセルで包んで、増殖を防ぎ、転移を防ぎます。

- [4] 腫瘍血管新生阻害作用がある
- [5] 活性酸素を抑える
- [6] 消炎効果がある
- [7] 排毒作用がある
- [8] 鎮痛効果がある
- [9] QOL(生活の質)が改善する
- [10] がん関連遺伝子の正常化

#### 4. 超高濃度ビタミン C 点滴療法の副作用

- ・ 大量のビタミン C のために、点滴濃度が濃くなり(医学的に高浸透圧という)、血液が一時的に濃くなり、のどが渇きます。
- ・ 空腹時にビタミン C 点滴を受けると、低血糖になることがありますので、食事を摂ってから受けて頂くようにしています。
- ・ ビタミン C 点滴を受けると腎結石ができる、ということが一部でいわれてきましたが、今や多数の論文によって完全に否定されています。確かにビタミン C によって体内のシュウ酸の合成が盛んになり、尿中のシュウ酸がわずかに増えて(まったく増えないというデータもある)、シュウ酸カルシウム結石ができることが疑われていたのですが、ビタミン C はカルシウムと結合しやすいことでシュウ酸カルシウム結石ができにくくなります。ビタミン C には利尿作用があり、腎臓内の血流がよくなり、尿の流れもよくなるために、より結石ができにくくなるのです。

(点滴・内服によるビタミン C 効果)

抗酸化	抗老化 美容
免疫改善	がん予防・治療 感染症予防・治療
抗動脈硬化	降圧 降コレステロール 降中性脂肪 血栓予防 血管強化 血流増加
血糖低下	糖尿病改善
コラーゲン増加	美容 骨密度増加 傷治癒促進
抗アレルギー	ぜんそく・花粉症・アトピー性皮膚炎
抗ウイルス	ウイルス感染の予防・治療
抗菌	細菌感染の予防・治療
排毒	重金属汚染の予防・治療 毒素の解毒
利尿	尿量増加 毒素排泄
滋養強壯	疲労回復 強精
鎮痛	鎮痛物質増加
体温上昇	冷え性改善
脳機能改善	抗うつ 抗不安 鎮静 認知症予防 知能改善

#### 《 診 療 時 間 》

月曜～金曜 (午前 8 時 30 分～12 時 10 分、午後 2 時 30 分～5 時 30 分)

土曜 (午前 8 時 30 分～12 時 10 分、午後 2 時～4 時)

休診日 木曜、日曜、祝日、年末年始

- ・ 各種健康保険取扱機関
- ・ 介護保険取扱機関
- ・ 結核予防法指定機関
- ・ 身体障害者認定医
- ・ 各種健康診断
- ・ 生活保護指定機関
- ・ 特定疾患取扱機関
- ・ 自立支援医療機関
- ・ 小中台小学校校医
- ・ 栄養療法(分子整合医学)

(携帯サイトへ)